

天台智顛と六即

宮 部 亮 侑

天台の教学において、六即は円教の行位⁽¹⁾を表すとされる。例えば『摩訶止観』卷一下・発大心では、六即について、

問う。何の意ぞ円に約して六即を説くや。

答う。円に諸法を観ずるに皆な六即と云う、故に円⁽²⁾の意を以て一切法を約するに、悉く六即を用いて位を判ず。(大正四六・一一上、傍線部筆者、以下同)

として、円教で六即を説く理由として、「円の意」によって一切法を約すと、すべて六即を用いて位を判ずることが可能であることを示すのである。

しかし『法華玄義』(以下、『玄義』と略す)において円教の行位が説かれる「位妙」最実位では、十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺を七位として説くため、六即についてはあまり明確ではない。⁽²⁾一方で『玄義』では卷一上・七番共解(觀心)に、

若し貧窮を免れんと欲せば当に三觀を勤むべし。上慢を免れんと欲せば当に六即を聞くべし。(大正三三・六八六上)

とあり、六即は三觀とともに説かれることから、『玄義』でも等閑視されるものではない。そのため、『玄義』所説の七位と六即とは完全に一致するものではないことが、すでに先学⁽³⁾によって指摘されているのである。

では、こうした七位と六即の両者はどのように円教の行位を説くものなのであろうか。本稿は天台智顛と六即をめぐって、基礎的ながら一考察を試みるものである。

一 位妙とは

天台智顛は、『玄義』位妙の総釈において、先に境妙・智妙・行妙が説かれたことにより、行の階差となるものとして位妙を明かすとする。また、天台智顛は諸經論に説かれる位には権実があることなどを簡潔に述べた上で、

今經(『法華經』のこと。筆者注)は、位の名、彰ならざれども、而も意は小大を兼ね、粗^は権実を判ず。然れども梵文尽く度らず、本經に必ず有らん。今、藥草喻品に但だ六位を明かす。(大正

三三・七二六中)

として、『法華經』の場合、位についての記述はあまり明確ではないが、葉草喩品所説の三草二木の譬喩によつて、小草位・中草位などの六位を明かすとする。また、『法華經』譬喩品の「一地の生ずるところ、一雨の潤すところ（大正九・一九中）」を経証として、さらに円教が説かれる最実位を扱つてゆくのである。

さて、天台における行位は様々な經典に説かれるとされる。『玄義』位妙（別教）では、『瓔珞經』所説の五十二位が、

瓔珞の五十二位は名義整足す、恐らくは是れ諸の大乗方等・別・円の位を結するならん。（大正三三・七三二下）

と、名義ともに整つた上に、方等・別・円など広くその位をまとめるものであると指摘される。そのため、別教の場合は五十二位が用いられるのである。

では、位妙で円教が説かれる最実位は、どのように説かれるのであろうか。天台智顛は位数を明かす中で、

諸の次位を論ずること、徒だ臆説に非ず。契經に隨順して四悉檀を以て位を明かすに妨げ無し。還りて七種に約して以て階位を明す。謂く、十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺なり。今、十信の前に於て更に五品の位を明かす云云。（大正三三・七三三上）

とあるように、五十二位を七位とし五品弟子位⁽⁴⁾を加える。また、諸經を引きながら位数を明かすなかで、位を阿字から茶

天台智顛と六即（宮部）

字までの四十二字に譬え、

広乗品⁽⁵⁾に、一切法は皆な是れ摩訶衍なりと明し竟りて、即ち四十二字門を説く。豈に円教菩薩の、初發心從り諸法実相を得て一切の佛法を具するが故に阿字と名け、妙覺地に至りて一切法の底を窮むるが故に茶字と名くるに非ずや。（大正三三・七三五上）

と述べる。ここで天台智顛は、『摩訶般若波羅蜜經』に一切法が大乗であると説かれることを引き、円教菩薩は初發心で諸法実相を得ることを「阿字」とし、妙覺地において一切法の底を窮めることを「茶字」とするのである。

さらに『玄義』には、『法華經』を経証として七位について次のようにある。

南岳師解して云く、開佛知見は是れ十住位、示佛知見は是れ十行位、悟佛知見は是れ十廻向位、入佛知見は是れ十地・等覺位なり。皆な佛知と言は、一切種智を得るなり。皆な佛見と言は、悉く佛眼を得るなり。（中略）及び今の文（『法華經』の經文のこと。筆者注）に四十二位を明すを引くに、炳然として皆な是れ無次位の次位なり。実相に達し、増道損生するに次位を論ずるのみ。（大正三三・七三五上）中）

天台智顛は、『法華經』に位があまり明確ではないことを先に示していたが、位妙に説かれる行位それぞれは『法華經』にもその意味が説かれることを強調した上で、本来は位がないところに位を立てているとする。それは、実相に達し増道損生するために位を論じているからであることを述べるので

ある。すなわち、位妙における円教の行位は、初発心で諸法実相を得てしまうことが前提となり、分別のために位の詳細が説かれ、開示悟入と関連づけられていることが理解されるのである。

こうして天台智顓は、妙位の始終において、

真如法の中には詮次無く、一地・二地無し。法性平等にして常に自ら寂然たり。豈に応に初後・始終を分別すべけんや。良に平等大慧、法界を觀するに若干有ること無きに由りて、能く若干の無明を破し、若干の智慧無きを顯出す。（中略）復た差別すと雖も則ち差別無し、故に不思議位と名くるなり。（大正三三・七四〇下）

と、真如法のなかでは法性平等であつて、差別は本来ないことを主張する。つまり、位妙では『瓔珞經』による七位が『法華經』によって理解され、「不思議位」が強調されることによって、本来は真如法であるから位の区別がないと示されるのである。

二 七位と六即

次に円教の七位と六即との連関について、『玄義』位妙には明確でないため『四教義』を見たい。

『四教義』卷十一（円教）では、「正しく円教の位を明さば、亦た還りて七位に約して、五十二位の不同を明す。（大正四六・七六一上）」として、位妙と同様に円教の行位を七位で

捉える。そこで十信位の、問法によって「信」が生ずることを説くなかで、無作の四実諦を次のように説くのである。

若し此れを聞きて信解無礙なれば、即ち一切衆生は即ち是れ不思議解脱、即ち是れ大乘、即ち是れ般若、即ち是れ首楞嚴、即ち佛性、即ち是れ法身、即ち是れ実相、即ち是れ中道第一義諦、即ち是れ如来藏、即ち是れ法界、即ち是れ畢竟空、即ち是れ一切佛法なりと信ず。此に因りて慈悲誓願して菩提心を發す、是れを円教の名字即の信解と為すなり。（大正四六・七六一中下）

つまり、無作の四実諦を聞いて「信解無礙」であれば、一切衆生を「不可思議解脱」「大乘」など、いわゆる実相の異名と同義として信じ、それによって慈悲誓願して菩提心を發すことが、「円教の名字即」であるとするのである。

すると、十信位と名字即は一致するものなのであろうか。しかし十信位について、信心によって修行することを明かす際に、天台智顓は十乘觀法を用いて論を展開し、

八に善く次位を識るとは、涅槃即生死・菩提即煩惱、此れは是れ理即なり。若し生死即涅槃・煩惱即菩提なりと知るは、是れを名字即と為す。此に因りて觀行分明なれば五品弟子を成ず、即ち是れ觀行即なり。六根清淨を得るを相似即と名け、四十一地を成ずるは即ち是れ分証眞実即なり。妙覺の果を証するは即ち是れ究竟即なり。（大正四六・七六一上中）

と述べる。ここでは、十住位以上の四十一地を成ずるのが分証即であるとされているのである。また、五品弟子位が觀行即であることから、十信位は相似即として捉えられよう。

一方で天台智顛は、十信位について行に因って位に入ることを述べる中で、

十に順道法愛を生ぜず。若し勝果を願求すれば、即ち所得の浅近の法門に愛著せず、故に願心と名け、是を以て菩薩は「生死即涅槃」なりと知り、煩惱即菩提と知る、故に能く巧に此の十法を修す、即ち是れ十信心を修するを、觀行即と名く。此に因りて若し三昧陀羅尼門を得れば、初心位に入ることを得。此の如く一信に十有り、十信に百有りて、鉄輪十信心位を成ず。此の信中に住して、六根清淨の功德不可思議なるを得。(大正四六・七六二中下)

として、十信を修することが觀行即であることを論じる。さらに初信のなかに十信・百信があるといった重層的な理解をすることによって「鉄輪十信位」を成ずるとするのである。このように、『四教義』では十信位に配当される六即について諸説が見られるが、『四教義』と同じく天台智顛による維摩經疏の別行本である『維摩經玄疏』卷一(觀心)には、「相似即とは、鉄輪十信の如し。(大正三八・五二〇上)」と、十信位は相似即到たることが示されるのである。

では、なぜ『四教義』において十信位に諸説が見られるのであろうか。すると、『四教義』は七位を論ずる前提として、平等法界は尚お悟と不悟とを論ぜず、孰か浅と深とを論ぜん。不悟なるに而も悟を論ずるは、浅ならず深ならざるに浅深を論ずるなり。(大正四六・七六一中)

天台智顛と六即(宮部)

と述べることで、法界は平等であることを強調するのである。すなわち、七位は本来平等であるところで説明のために用いられていると捉えることができよう。ならば、天台智顛は『玄義』位妙と同様に、説明のために説かれた七位であることを『四教義』でも主張していることになる。ならば、七位は基本的に六即と單純に対応させられるものではない、⁽⁶⁾と考えてよいのではなからうか。

三 六即をめぐって

では、六即はどのような位置で行位を説くものなのであろうか。天台智顛は『摩訶止觀』卷三下・撰法で、止觀が広く法に撰していることを六意に分別する。その撰一切位で、

若し一地は即ち二地、二地は即ち三地、寂滅真如にして何の次位か有らんと云わば、此れ則ち次位有ること無し。又た大乘經中の処処に皆な一切の地位を説く。良に以れば無生無滅の正慧にして無所得なり。能く煩惱・業・苦を治す。三道若し淨まれば、無為法の中に於て而も差別有り、次位何ぞ嫌わん。(大正四六・三〇下)

と、位を寂滅真如として捉えた場合は位がないことになってしまうが、一方で大乘經典には位が広く説かれていることが述べられる。それは、惑業苦の煩惱を治すものであり、これが治されたことで無為法のなかに差別が認められることが示されるのである。

このように、天台智顓は位における差別の有無を論じた上で、諸経論に説かれる行位は位として独立してあるわけではなく、三觀と撰するものであることを述べる。そこで、

若し円の信解行は即事而真なり。觀行従り相似に入り、進んで無明を破し、佛の知見を開示悟入す。（大正四六・三一上）

と、円の信解行が即事而真であつて、觀行即より相似即に入り、さらに無明を破すことで佛知見の開示悟入となることを論じてるのである。

すると、三觀と位との連関はどのようなものなのであろうか。『維摩經玄疏』卷二に説かれる一心三智を見たい。

第二に一心三智、但だ是れ一佛乘なるを明さば、若し因縁三諦を觀ずれば、初心に即ち一心三智を得、佛知見を開き、佛性を見るところと名く、即ち大乘なり。（中略）

今、一心三觀は大乘に会成するを明さば、大とは不可思議を名け、乘は能運を以て義と為す。一心三觀の境智は並びに是れ不思議の法、能く菩薩を運びて道場に至る、故に大乘と名く。此れ須く六即に約して円教の一佛乘を明すべし、即ち是れ六種の大乗の義なり。（大正三八・五三〇中下）

まず天台智顓は、因縁三諦を觀ずることによつて、初心に一心三智を得、佛知見を開き、佛性を見ることが「大乘」と規定する。また、一心三觀が大乘であることを論ずる際に、六即によつて円教の一仏乗が明かされるとするのである。さらに、

一に理即の大乗を明かさば、涅槃經に云く「一切衆生は皆な是れ大乘なり」と。

二に名字即の大乗とは、理即に縁じて即ち大乘心を発すなり。

三に觀行即の大乗とは、即ち是れ不思議十法を修して通達することと無闕なり。（大正三八・五三〇下）

四に相似即の大乗とは、即ち是れ六根清淨を得、『法華經』に説くが如し。（大正三八・五三一中）

など、六即それぞれが大乘であることが指摘される。その上で、

『法華經』の「佛は自ら大乘に住したまへり 其の所得の法の如きは 定慧力もて莊嚴せり」の如し。故に『大品經』に云く「是の乘は三界の中従り出で薩婆若の中に到りて住す。是の乘、動ぜず出でず」と。故に理即大乘は發菩提心従り名字即・觀行即・相似即を成ず、即ち是の乘は三界従り出るなり。（大正三八・五三一中）

と、一切衆生が大乘であると理解する理即大乘の段階で、大乘心の發心である名字即、さらには不思議十法を修す觀行即、六根清淨を得る相似即を成ずることを説くのである。このように、理即大乘によつて相似即までを成ずるといふことは、六即がそれぞれの段階で止まるものではない、といふことができるのではなからうか。

また、六即は一心三觀が大乘であることの説明に用いられるものであつたが、「大乘」は一心三智を得て佛知見を開き、佛性を見るものであつた。ならば、六即は七位と同様に佛知

見を説くものとして捉えることが可能であろう。つまり、六即は行位として独立したのではなく、天台智顛は円教の見方として七位と六即とで教観ともに佛知見の開示悟入を説いたことが推察される。

さらに、冒頭に見た『摩訶止観』巻一下に、

問う。何の意ぞ円に約して六即を説くや。

答う。円に諸法を觀ずるに皆な六即と云う、故に円の意を以て一切法を約するに、悉く六即を用いて位を判ず。(大正四六・一一上)

とあった。ここで六即が用いられるのは「円の意」によって一切法を觀ずる際である。すなわち、円教の見方は一切法を「大乘」として捉えることであると理解されるのである。

なお、本稿では六即の全体を把握するにとどまったが、六即と七位との連関についてはさらに改めて検討を試みたい。

- 1 福田堯穎師『天台学概論』(三省堂・一九五四年)に、六即について「圓人の任運無作の修行の位次階程を端的に表現する六即の階位(二四一頁)」とある。
- 2 『法華玄義』位妙・開顯において、毒発の譬喩のなかに若干の記述が見られる。大正三三・七三九上く中参照。
- 3 加藤勉稿「六即の成立過程について」(『天台学报』二三・一九八一年)、大野栄人博士「『摩訶止観』における止観の成立史的考察」(同著『天台止観成立史の研究』所収・法蔵館・一九九四年)など。その他、六即の成立についての先行研究は数多いためここでは割愛したい。

天台智顛と六即(宮部)

- 4 五品弟子位をめぐっては、佐藤哲英博士「天台大師における圓教行位の形成」(『印仏研』一〇―二、一九六二年)、また鹽入良道博士「化法四教に於ける行位の問題」(『天台学报』三三、一九六一年)参照。

5 『摩訶般若波羅蜜經』巻五、大正八・二五六上く中。

6 佐藤前掲論文に「思うに智顛における圓教の行位論は、三大部講説時代も晩年時代も、瓔珞經の十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺の五十二位を借り来たつた七位説と、理即・名字即・觀行即・相似即・分眞即・究竟即の六即説との二本建てで進められ、智顛自身においてはこの兩説が最後まで結びつかなくつたのではあるまいか。」とある。

7 分眞即・究竟即の大乘については、大正三八・五三一中参照。

8 『法華經』巻一(方便品)、大正九・八上。

9 『摩訶般若波羅蜜經』巻六、大正八・二五九下。

〈キーワード〉 六即、七位、位妙、最実位

(大正大学綜合佛敎研究所研究員・博士(仏敎学))